

## 「横浜型新救急システム」の運用状況について

### 《 運用開始から6か月の状況 》

横浜市では、「横浜市救急条例」の施行に伴い、全国初となる 119 番通報の内容から緊急度・重症度の識別と、傷病者の状態に応じて救急車や消防車を弾力的に運用する「横浜型新救急システム」の運用を平成 20 年 10 月 1 日から開始したところですが、開始から6か月間の運用状況をまとめましたのでお知らせします。

#### 1 対象期間

平成 20 年 10 月 1 日（8 時 30 分）から平成 21 年 3 月 31 日（24 時 00 分）まで

#### 2 主な運用状況（詳細は別紙）

##### (1) 緊急度・重症度識別の実施状況

ア 運用開始から6か月間で、73,992 件の救急出場があり、災害等に伴う救急出場を除く、68,692 件について緊急度・重症度識別（コールトリアージ）を行いました。このうち、緊急度・重症度が低い「C」と識別した、3,000 件のうち、搬送した医療機関の医師により、初診時に「重篤」（生命危険が切迫しているもの）と診断されたアンダートリアージが 2 件発生しました。

このような事例に対する検証結果を踏まえ、識別プログラムを修正し、間もなく、修正した識別プログラムの運用を開始する予定です。

イ 救急相談に転送したものは 530 件ありました。そのうち、相談後、119 番に再転送し救急車を出場させたものが 35 件ありましたが、いずれも、生命危険や重症度の高いものではありませんでした。（※救急相談は民間事業者に委託）

##### (2) 現場到着時間の状況

ア コールトリアージで、緊急度・重症度が高いと判断された事案ほど、最先着部隊の現場到着時間が早くなっています。

イ 救急隊が出場中に、その地域に重複して救急要請があった場合に、待機している救命活動隊が空白地域をカバーし、現場到着時間の遅れを防いだ実績があがっています。

#### 3 今後の取組

(1) 識別結果については、今後も継続的に横浜市メディカルコントロール協議会の指導を得ながら検証を行っていきます。さらに、検証結果を分析し、識別プログラムの修正を行い、新救急システム全体の充実に努めます。

(2) 指令管制員による識別は、新救急システムが効率的に運用できるよう、継続的に研修を行うなど、適切な識別の実施に努めていきます。

(3) 識別結果に応じた救急隊、救命活動隊及び消防隊の連携活動は定着してきましたが、6か月間の運用状況を振り返り、問題点や課題を更に抽出し、効率的に活動できる体制について検討を重ねていきます。

# 横浜型新救急システムの運用状況（平成20年10月1日～平成21年3月31日）

平成21年5月21日 安全管理局

## (1) 識別に基づくディスパッチの状況

**ディスパッチレベル・傷病程度別件数(表-1)**

※ディスパッチ：緊急度・重症度識別結果に基づく出場隊の選別・指令  
 ※CPA：心肺停止傷病者 ※「%」は小数点第2位で四捨五入

ディスパッチレベル (識別結果)	医師の初診時診断					その他	不取扱	計	%	CPA	%
	死亡	重篤	重症	中等症	軽症						
レベル1 (A+) ※緊急度 高	641	1161	614	1185	827	0	1077	5505	8.0%	2423	89.9%
レベル2 (A、B、C+、不可) ※緊急度 中	52	729	3138	18161	32133	14	5960	60187	87.6%	272	10.1%
レベル3 (C) ※緊急度 低	0	2	6	297	2405	0	290	3000	4.4%	0	0.0%
合計	693	1892	3758	19643	35365	14	7327	68692	100%	2695	100%
%	1.0%	2.8%	5.5%	28.6%	51.5%	0.0%	10.7%	100%			
対象外	19	179	812	2600	890	1	799	5300		118	

※ディスパッチレベル別の出場隊の編成  
 レベル1 … 2人で活動する救急隊+救命活動隊+消防隊 又は 3人で活動する救急隊+消防隊  
 レベル2 … 2人で活動する救急隊+救命活動隊 又は 3人で活動する救急隊  
 レベル3 … 2人で活動する救急隊 又は 3人で活動する救急隊

**識別結果** A+: 生命危険が切迫している可能性が極めて高いもの A: 生命危険が切迫している可能性があるもの B: 生命の危険性があるもの C+: 生命の危険性はないが搬送困難が伴うと思われるもの C: 生命の危険性はなく搬送困難が伴う可能性が低いもの 不可: 必要な情報が聴取できず識別できないもの 対象外: 識別を実施しないもの(災害出場及び転院搬送)、レベル2相当で対応

(表-1)は、119番通報時の緊急度・重症度識別(コールトリアージ)の結果に応じた出場部隊のレベル別(ディスパッチレベル)と、病院搬送後の医師の初診時の診断別の件数をまとめたものです。この識別結果は、横浜市メディカルコントロール協議会の救急の専門医により検証を行っています。

- 緊急度・重症度が最も低い「C」と識別したものの3,000件のうち、搬送した医療機関の医師により、初診時に「重篤」(生命の危険が切迫しているもの)と診断された、アンダートリアージが2件ありました。1件は、平成20年12月の食物アレルギーによる救急要請で、通報段階では、危険な症状が認められませんでした。医療機関到着時まで症状が悪化したため、「重篤」と診断されたもの。この方は、医療機関において処置を受け、症状軽快し、翌日退院されました。他の1件は、平成21年3月の事案で、腹痛があるが、意識や歩行に問題がないことから、軽症と識別されましたが、医療機関において「消化管穿孔」であることが判明し、「重篤」と診断されたもの。ただし、この案件では、現場に到着した救急隊員が、重症度が高いと判断し、直ちに救命活動隊を増強して対応するといったフィールドトリアージ(現場識別)が有効に働いた事案でもあります。なお、この方は、搬送先医療機関において緊急手術を受け、現在は生命への危険もなく、快方に向かわれています。これらの事案の検証結果を踏まえ、識別プログラムを修正し、間もなく、修正した識別プログラムの運用を開始する予定です。また、これらの事案の検証結果を、職員の教育・訓練にも反映していきます。

- CPA事案は緊急度・重症度が最も高い「ディスパッチレベル1(A+)」の判定区分でほぼ9割(89.9%)を識別しております。また一方で、CPA事案を緊急度が低い「ディスパッチレベル3(C)」の判定区分に識別したものは発生していません。
- ディスパッチレベル2以上が65,692件(95.6%)と、大多数を占めるのに対し、ディスパッチレベル3は3,000件(4.4%)にとどまっています。運用開始から6ヵ月が経過しましたが、アンダートリアージを限りなくゼロに近づけるという目指して、今後もより安全性の高い慎重な識別を行っていきます。

## (2) 現着時間の状況

**ディスパッチレベル・隊別平均現着時間(表-2)**

**救命活動隊(F隊)が先着した事案(F隊待機中で別の署所救急隊との連携事案)(表-3)**

ディスパッチレベル (識別結果)	最先着部隊の 平均現着時間
レベル1 (A+) ※緊急度 高	5分10秒
レベル2 (A、B、C+、不可) ※緊急度 中	6分03秒
レベル3 (C) ※緊急度 低	6分11秒
平均	5分59秒

隊別	現着時間	走行距離	件数	CPA (内数)
救急隊平均	8分14秒	3.2km	1,100件	43件
救命活動隊平均	5分32秒	1.9km		
差	2分42秒	1.3km		

(表-2)は、識別結果に応じたレベル別に、出場した救急隊等の部隊ごとに最も早く現場に到着した部隊(最先着隊)の平均現場到着時間を示したものです。

- 運用開始3ヵ月と同様に緊急度・重症度が高いほど、最先着隊の現場到着時間が早くなっています。最も緊急度・重症度が高い「A+」での出場時では、平均現着時間が5分10秒となっております。新救急システム運用開始前である平成19年中(救急隊のみの出場)の平均現場到着時間は6分で、これと比較すると、消防隊を含めた複数の部隊による連携活動によって、より早い現着と傷病者へのより早い処置が開始できていることになり、この救急システムの導入による効果となっております。

(表-3)は、救命活動隊が消防署所に待機中で、同じ消防署所の救急隊が出場中のため、別の消防署所に配置されている救急隊と連携した事案の現場到着時間と走行距離の比較を示しています。

- 救命活動隊が救急隊よりも現場到着までの走行距離が平均で1.3km短く、現場到着時間は平均で2分42秒早くなっております。このことは、直近の救急隊が出場中の空白地域を救命活動隊がカバーしているもので、これも本救急システムの導入による効果となっております。この中には、CPA事案が43件含まれており、救急隊が到着する前に、救命活動隊に乗車する救急救命士により、救命処置が施されている例も含まれています。今後も継続していくことで、救命率の向上が図れるものと考えます。

※データは速報値のため、今後修正される場合があります。